

特集

第 75 回国立病院総合医学会 (WEB) を終えて

大泉英二、三上定利、水吉勝彦、佐藤友紀

国立病院機構仙台医療センター 事務部

(2021 年 12 月 16 日受稿、2021 年 12 月 16 日受理、連絡先：三上定利・仙台医療センター 事務部)

1. はじめに

国立病院総合医学会は、医学及び医療に関する研究等を発表する場として、職員が行う研究の質の向上、政策医療に関する情報の提供、国立病院機構が提供する医療の質の向上を目的として毎年 1 回、グループ担当理事（北海道東北、関東信越、東海、近畿、中国四国、九州）の各担当区域単位の持ち回りで開催しており、令和元年度国立医療学会臨時社員総会・評議員会において、第 75 回は北海道東北グループが担当し、大会長施設は仙台医療センター、副会長施設は米沢病院、宮城病院に決定した。

北海道東北グループでは、開催地を仙台市と札幌市で交互に開催しており、前回担当した際は、札幌市で開催していたことから、第 75 回は仙台市で開催する運びとなった。

2. 開催日、会場確保

事務部では、第 75 回大会は仙台市が会場となり、仙台医療センターが大会長施設になるとの見込みを立て、3 年前の平成 30 年度から準備を開始した。最初に取り組んだのは開催日の仮決めと会場確保である。本学会は、11 月に開催することが多いが、その時期の東北は寒いことから、10 月下旬で計画し、2021 年 10 月 22 日(金)、23 日(土)と仮決めた。一方会場確保は、前回仙台市で開催した際、最大収容人数の都合により会場を 3 つに分け、移動にはバスを利用したが、当時と違って地下鉄東西線が開通したことにより、会場候補としていた仙台国際センターまで仙台駅から地下鉄東西線で 5 分と利便性が大きく向上した。会場は仙台国際センターを中心に徒歩で移動可能な範囲にある東北大学百周年記念会館川内萩ホール、宮城県医師会館とし、取り急ぎ仮予約した。



開会式 上之原会長挨拶



開会式 司会者（当院事務職員）

一番難航したのが、全員交換会の会場である。過去大会の会場を見ると、那覇市ではビーチ、高松市では高松城址、名古屋では水族館と各開催地で趣向を凝らした会場としていた。全員交流会の参加者数は約 1,500 名、仙台市内で同規模の交流会を開催するには、屋外であれば楽天生命パーク、仙台城址など複数候補があったが、雨天時の対応、気温などを考慮すると屋内で開催すべきではないかと考え、仙台市内で 1,500 名が入る唯一のホテルメトロポリタン仙台を仮予約し、2019 年 12 月 17 日に開催した最初の事務局会議で学会会場と併せて決定事項とした。

3. テーマ決定

テーマは、第 74 回国立病院総合医学会及び本学会前に開催される各種協議会の総会で公表されることから、ポスター作製などを考慮し、2020 年 5 月決定を目指して検討を進め、飛田宗重副会長（米沢病院院長）、永野功副会長（宮城病院院長）のテーマ案をベースに、上之原広司会長（仙台医療センター院長）がテーマ最終案を検討、事務局会議で提案し、合意を得て決定となった。

テーマ 主題 社会の大転換期における国立医療
副題 救う、支える、育む、拓く ～連帯と挑戦～

テーマは、2011 年の東日本大震災から 10 年、新型コロナウイルス感染症対応、懸命に医療に従事している国立医療機関の職員の思いをテーマに込め、

決定したテーマに合わせて、PR 用のポスター、動画の作成を業者に依頼し、「社会の大転換期」にふさわしい PR ポスター、PR 動画が完成し、令和 2 年度の各種協議会総会、第 74 回国立病院総合医学会の閉会式で公開され、以降第 75 回国立病院総合医学会ホームページ上で一般公開された。

4. 新型コロナウイルス感染症の爆発的な流行による開催形式の変更

2020 年 1 月、大型クルーズ船から始まった新型コロナウイルス感染症との闘いは、日本国内でも徐々に感染が拡大し、同年 4 月には政府による緊急事態宣言が発出され、感染者を受け入れる病床も逼迫し始め、第 74 回大会（開催地：新潟市）は残念ながら完全 WEB 開催に変更となった。

このような状況の中、事務局での考えは、「来年度はワクチン接種も進み、感染流行も収束しているだろう」と考え、現地開催を想定して準備を進めていた。2021 年 2 月、医療従事者に対するワクチンの先行接種が開始され、国立病院機構職員のワクチン接種が終われば、第 75 回大会は現地開催でも問題ないのではとの希望を持って準備を進めたが、首都圏、大阪など大都市での感染流行が継続し、さらに医療従事者、高齢者以外へのワクチン接種は当分先になることが分かり、安全に現地開催することが困難と判断し、2021 年 4 月、地域限定の現地参加、感染流行地域は WEB 参加とするハイブリット形式での開催に変更する方向としたが、機構本部から現地に集まるリスクを問題提起され、再度検討した結



シンポジウムの座長スタンバイ（飛田副会長）



配信スタジオ風景

果、感染リスクゼロを目指して安全に開催できるよう努めることはできるが、感染リスクをゼロにすることは困難であると判断し、2021 年 5 月、完全 WEB 開催に変更するに至った。

5. 企業協賛に翻弄

開催形式が WEB 形式に変更となったことに伴い、企業協賛のスポンサーセミナー、出展のキャンセルが相次ぎ、収支見込をプラスにすることができずに苦慮していた。WEB 形式での開催は、企業としての PR 効果が薄いと判断されたようであり、特に大口の企業協賛であるスポンサーセミナーのキャンセルは大きな痛手となった。キャンセルした企業には広告、寄付での協賛をお願いし、さらに新規企業協賛の獲得に向けて、営業活動を再開した。

診療科の先生からの紹介、会長・副会長施設で取引がある企業への再度の営業活動など、2021 年 9 月末まで精力的に取り組む、特に広告での協賛企業を大きく伸ばし、第 74 回大会の 29 社に対し、第 75 回大会は 52 社となり、収支見込がプラスに転じる運びとなった。

6. WEB に対する不慣れ

シンポジウムや口演の動画撮影が進んでいったが、WEB に対する不慣れから、職員の不安感が大きく、対応方法に関する照会が相次いだ。特にシンポジウムは複数人の参加で動画を撮影することになるが、操作方法が分からない、ネットワークが不安定など、様々な問題が生じた。運営事務局（委託業

者）の方針で撮影は演者等の責任で撮影するよう指示されていたが、必要に応じてリモートで参加して支援するなどの対応をお願いした。

7. ID パスワード問題

開会式の 1 週間前、運営事務局から ID・パスワードが発行されたが、団体で参加登録した職員は同一団体で一つの ID・パスワードが発行され、ログイン時に自分の名前を選択してログインするという運用であった。その結果、団体内の他参加者名でもログインすることが可能となり、「いいね！」ボタンの不正利用が簡単にできる状態であることが判明した。昨年度は団体登録の場合でも個人毎に ID・パスワードが発行されており、急遽運営事務局である業者に連絡し、何らかの対策を講ずるよう連絡した。原因は今年度から業者側で新しいシステムを導入し、システム運用が変更となったとのことであった。運営事務局と調整した結果、団体参加者に対しても個人 ID・パスワードを発行することとし、配布が完了する期間を 10 月末に設定、その間は「いいね！」ボタンを使用できない運用にシステムを修正した。若干の混乱があったが、ログイン時のメッセージなどで周知徹底を図ることで大きな混乱を避けることができ、無事開会式を迎えることができた。

8. 開会式、閉会式

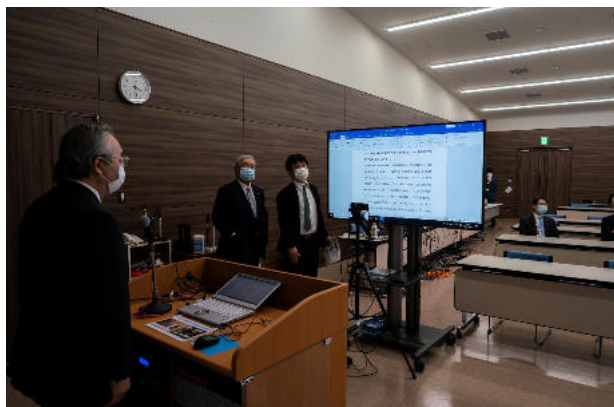
開会式、閉会式は貸しスタジオなどを借りるのではなく、費用削減の為、会場を当院大講堂、配信ス



撮影会場メインスクリーン



シンポジウムの配信画面



閉会の辞スタンバイ（飛田副院長）



閉会式後の集合写真

タジオを当院大会議室とし、さらに司会を仙台医療センターの職員で行うなど費用を大きく削減した。

開会式前日、リハーサルを実施し、本番の流れを一通り行い、カメラの位置、音量のほか、動画配信の設定など細かい微調整も行った。開会式当日は、実行委員会のメンバーが当院に集まり、2021年10月23日(土)8時50分から厳粛な雰囲気で開催式が始まった。開会式では、上之原広司会長による開会宣言（会場からLIVE配信）後、楠岡英雄国立病院機構理事長から開会の辞（自宅からLIVE配信）を賜り、井原和人厚生労働省医政局長（録画配信）、村井嘉浩宮城県知事（録画配信）、佐藤和宏宮城県医師会会長（録画配信）、石井幹子宮城県看護協会会長（録画配信）からご祝辞を頂戴し、無事開会式を終了した。

閉会式は、1週間後の2021年10月30日(土)16時からと設定した。これは、前回大会の例で、オンデマンド配信の終了日に合わせた為、大会を開始して1ヶ月後に閉会式を行ったことから、大会が長く感じたとの意見が実行委員会であったことを踏まえ、大会開始して1週間後に閉会式を開催することになった。オンデマンド配信は閉会式後も継続し、2021年11月20日(土)までとした。閉会式では、上之原広司会長からの挨拶後、高橋毅次期会長（熊本医療センター院長）、上山秀嗣次期副会長（熊本再春医療センター院長）、森田茂樹次期副会長（九州

医療センター院長）からご挨拶を頂戴し、第76回国立病院総合医学会のPR動画が公開された。最後に飛田宗重副会長、永野功副会長から閉会の辞をもって第75回国立病院総合医学会を閉会した。

9. まとめ

第75回国立病院総合医学会を振り返り、大会長、副会長及び実行委員会のメンバーの思いとして、「今大会は東日本大震災後10年目の節目、2年ぶりの現地開催で盛大なおもてなしをしたい！」という思いで準備を進めてきたが、新型コロナウイルス感染症の爆発的流行により、2年続けてWEB形式での開催となったことは非常に残念な結果となった。

しかしながら、新型コロナウイルス感染症に負けず、WEBというIT技術を駆使して全国大会を開催し、医療の最先端の情報、各病院の研究成果等を情報共有できたことは、国立病院機構が新型コロナウイルス感染症と戦いながら、その先を見据えた対応を考えることができる場として大変有意義な学会であったと考えている。大会長施設の事務局として至らぬ点が多々あったと思うが、当院職員の皆様のほか、実行委員会のメンバーである副会長施設の皆様、北海道東北グループの皆様、その他本学会に携わった皆様のご支援ご協力により、無事第75回国立病院総合医学会を終えることができたことに感謝申し上げます。ありがとうございました。